

初台リハビリテーション病院

威勢の良いかけ声で“餅つき大会”を開催

去る12月27日に、餅つき大会を開催いたしました。入院患者さま・外来患者さまから小さなお子さままで、たくさんの方が「よいしょ!よいしょ!」の掛け声で一生懸命ついたお餅は、職員が丁寧にまるめ、多くの皆さまにふるまわれました。威勢のいい餅つきで一年の労をねぎらい、無事に年を越し、皆さまが新たな良い年をお迎えることを心よりお祈り申し上げます。



船橋市立リハビリテーション病院

12月27日は大盛況! 年末恒例もちつき大会

寒風吹く中、今年も患者さまと外でおもちをつきました!『ヨイしょー!』と掛け声の中、患者さまの笑顔を見られて嬉しい限りです! 並んで、おもちをついてくれた皆さま、本当にありがとうございました。おもちをつく日は地方によっても異なりますが、門松と同様に30日までにつくのが良いとされているそうです。一昔前まではそんな光景も近所で見られましたが、最近はありませんね。それでも私たちは患者さまやご家族の方々と一緒に、これからも色々な行事を行っていききたいと思います。今年も皆さま宜しくお願いいたします!



船橋市リハビリセンター

第3回 ふなばし福祉まつり in イオンモール船橋

船橋市立リハビリテーション病院と共同で、イオンモール船橋にブースを出展し、介護福祉用具の展示や、リハビリ機器の体験コーナーなど設置しました。会場がショッピングモールということもあり、普段福祉・医療に興味を持ちにくい方に目を向けてもらう貴重な機会となりました。また、皮細工などはお子さまにも人気がありました。今後もこのような活動を行い、地域の方々へリハビリテーションについて接していただく機会を提供していきたいと思っております。



在宅総合ケアセンター元浅草

リハビリの意欲に繋がる食事作りを!!

これまで提供していたお食事は委託会社に依頼しておりましたが、昨年7月より、当法人が作ることになりました。より美味しくはもちろん、食べる事がリハビリの意欲に繋がるように、嚥下食もきれいで美味しく提供できることを目指して日々取り組んでおります。クリスマスには、10日間じっくり煮込んだビーフシチューを、年末年始には年越し蕎麦、御節をご用意しました。今後も季節の行事に合わせた食事、地域の特性を踏まえたメニュー構成、料理の種類を増やすなど、日々精進します。



在宅総合ケアセンター成城

願いを込めてつきあげた皆さんの手づくり鏡餅で新年を祝う

去る12月29日、ご入院中の患者さまと、通所リハビリテーションのご利用者さまを中心に餅つき大会を開催いたしました。大勢の方にご参加いただき、たいへん賑やかなムードの中、「来年もまた良い年になりますように」と願いを込めて、一つき一つき力いっぱい餅をついていただきました。また、つきあがった餅は皆さんの手によって素敵な鏡餅になりました。皆さま、本年もどうぞよろしくお祈り申し上げます。



kisei-kai
情報誌



2015(平成27)年を祝して年頭のご挨拶を



事務局 局長
森本 榮

「未」年に医療法人社団輝生会の成長を目指して

新年あけましておめでとうございます。新年草々ですが日本は少子高齢化に伴い、2025年には高齢者1人を2人の若者で支え、2050年には高齢者1人を1人の若者で支える時代が到来すると推計されています。認知症の高齢者、高齢障がい者の増加等多数の問題が予測され、特に首都圏の高齢者問題は重要な課題になっています。

医療法人社団輝生会はこの13年間で東京都、千葉県に回復期リハビリテーション病院2か所、医療・介護の複合在宅サービスの拠点3か所を開設し「障がいを受けても在宅で自立した暮らしが営めるよう」入院サービス、在宅医療・介護サービスを提供してまいりました。職員も輝生会開設当初167名が現在1,100人を超える職員へと増加し、到来する高齢社会の課題解決の一翼を担える法人運営を目指し日々努力しております。

そのような中、2015年は「未」年、この干支の由来は群れをなす羊は、家族の安泰を示しつつまでも平和に暮らす事を意味しています。輝生会の活動を年末に置き換え述べさせていただくと、輝くスタッフが羊の群れ(チームアプローチ)のように一致団結し、法人の理念のもとに、患者・ご家族さま皆さまが安泰で平和な暮らしが継続できるように支えてまいります。

もう一点、「未」は成長途上の植物の意味で子(根)から始まり亥に至る植物の発達段階を十二段に分けて表したもので、「未」はまだ熟しきらない成長途上の植物を表していると言われており、つまり未熟の「未」という意味でもあるようです。13年目ともなると組織がマンネリ化し、硬直するケースも散見します。ここは、未熟の「未」を意識し、患者・ご家族さまの声を率直に聴ける体制を強化し、各拠点の医療・介護サービスの質の再点検、職員教育の強化等を図り、更なる成長に結び付けるよう「未」年を意識し研鑽いたします。

多くの皆さまのご意見ご指導をお願いいたします。



教育研修局 局長
小林 由紀子

輝生会2015年度の展望 —決意と感謝をこめて—

新年あけましておめでとうございます。2015年の干支は未年(ひつじどし)です。その由来は、「群れをなす羊は家族の安泰を示し、いつまでも平和に暮らすことを意味している」とのことでした。つまり、穏やかで人情に厚く…このように知り、干支に守られ今年も、平和で健やかに穏やかに過ぎて行く一年であってほしいと心から祈る気持ちになりました。とはいえ、昨年を振り返りますと、世界では今だに終息をみないエボラ出血熱への恐怖、さらに国内では突然の局地的な豪雨により山を岩を森林を崩した一瞬の悲劇、また火山の国・日本では避けられない突然の噴火災害、昨年暮れには北信州の大地を揺らす震災など…自然災害への脅威、これらに対して人間の力は到底敵うものではないことを痛感する一年でした。

さて、昨年の診療報酬改定で「地域包括ケアシステムの構築、重点課題として入院・外来を含んだ医療機関の機能分化・強化と連携、その上で在宅医療の充実が大前提」と打ち出され、輝生会ではその主旨に従って実践を積み重ねてまいりました。その成果は未だ道半ばであり、新年を迎えるにあたり、ご利用、ご協力いただく全ての皆さまとの信頼関係を礎に、研鑽を重ねていく決意であります。また昨年4月から、在宅支援の強化として船橋市リハビリセンターがスタートしました。今年はその中に訪問看護ステーションを開設してまいります。実践の先輩である元浅草や成城の拠点と協力し合い、船橋市周辺地域に安心を提供する訪問看護サービスを展開したいと考えております。

輝生会は、回復期から生活(維持)期へのリハ・ケアの充実を図り、患者さま、利用者の皆さま、ご家族に納得していただける実践を目指すことを一義にしております。引き続き当法人の成長に向けて多くの皆さまからのご意見やご指導を頂きたい、本年もどうぞよろしくお祈り申し上げます。

季刊情報誌「輝net」 編集発行 医療法人社団 輝生会 本部/〒151-0071 東京都渋谷区本町3-52-6 <http://www.kiseikai-reha.com>

初台リハビリテーション病院 〒151-0071 東京都渋谷区本町3-53-3 TEL.03-5365-8500 <http://www.hatsudai-reha.or.jp>
 船橋市立リハビリテーション病院 〒273-0866 千葉県船橋市夏見台4-26-1 TEL.047-439-1200 <http://www.funabashi-reha.com>
 船橋市リハビリセンター 〒274-0822 千葉県船橋市飯山満町2-519-3 TEL.047-468-2001 <http://www.funabashi-rehacen.com>
 在宅総合ケアセンター元浅草 〒111-0041 東京都台東区元浅草1-6-17 TEL.03-5828-8031 <http://www.motoasakusa-reha.com>
 在宅総合ケアセンター成城 〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷3-8-7 TEL.03-5429-2292 <http://www.seijo-reha.com>

本誌へのご意見ご要望はメールにてお寄せください。 contact@kiseikai-reha.com

基本理念と方針	■ 「人間の尊厳」の保持	■ 「地域リハビリテーション」の推進	■ 「情報」の開示
	■ 「主体性・自己決定権」の尊重	■ 「ノーマライゼーション」の実現	
患者さまの権利	■ 人権を尊重される権利	■ 最善の医療を受ける権利	■ 自らの意志で選択・決定する権利
	■ 自分の診療の情報や記録を知り、求める権利		■ プライバシーの保護を求める権利

リハビリテーション・ケア合同研究大会 長崎2014 「がんばらんば～安心して暮らせる地域づくりに向けて～」

11月6日～8日、「リハビリテーション・ケア合同研究大会 長崎2014」が開催されました。「がんばらんば～安心して暮らせる地域づくりに向けて～」をテーマに、リハビリテーション医療に関わる様々な職種が全国から集い、講演やシンポジウム、研究発表などが行われました。

今回の研究大会では特別企画として「医科歯科連携」「災害リハビリテーション」「地域医療と地域包括ケア」「長崎における地域リハビリテーションの取り組み」といった特別セッションが多く設けられており、歴史・文化・人々の生活など地域の特異性を踏まえた上での地域医療や介護のあり方を考えることの重要性を知ることができました。また来たる2025年の地域包括ケアシステムの構築に向け、地域生活を支え活気ある地域を作り出すために、私たちリハビリテーションに関わる者の任務や役割についての学びを深める場となりました。

今回、輝生会からは52名のスタッフが参加し、16名のスタッフが研究発表を行いました。全国学会での初めての発表に、緊張の面持ちのスタッフもいましたが、輝生会研究発表会での予演の経験をいかし、質疑応答にも落ち着いて対応していました。また参加したスタッフそれぞれに他施設の発表を聞くことを通して、専門的な研究や新しい取り組みに大いに刺激を受けたり、懇親会を通して全国のリハビリテーションに関わるスタッフと出会い、意見を交わすことができました。

開会式では長崎くんちで奉納される「鯨太鼓」が披露され、その迫りに圧倒されるとともに、学会の間には長崎の多彩な食文化や美しい景色に触れ、長崎の地も満喫しながら、明日への活力を得られた3日間でした。

文責／教育研修部 井上典子（言語聴覚士）



▲今回発表したスタッフ



▲お天気にも恵まれ、長崎の美しい景色を堪能することができました

接遇コンテストが開催されました

私どもの法人は『人間の尊厳の保持』を理念の最初に掲げており、その理念の実現のために接遇風土の醸成に力を入れています。

その取り組みの一環として、毎年12月に5つの拠点から接遇優良者を職員全員で選ぶコンテストを開催しています。今回は各拠点から「あいさつ」「身だしなみ」「人への対応」に優れた接遇優良者が計20名選出されました。そして、ますますの接遇風土の醸成をリードしてもらおうよう、全拠点合同で行われる法人の忘年会で表彰を致しました。

スタッフの接遇についてはお褒めもお叱りもいただくことがありますが、今年も一層の向上に努めてまいります。当法人の利用者の皆さまにはスタッフの接遇を通して、元気になるいただいたり、頑張ろうと思っただけでよかったら嬉しく思います。

文責／法人総合企画室 取出涼子（ソーシャルワーカー）



第22回 輝生会研究発表大会 特別講演

上田真弓さんの講演「一度限りの人生だから」を聴いて

当法人が職員対象に研究発表の場として開催しています第22回輝生会研究発表大会(12月9日)のために、上田真弓さんがはるばる高知から車椅子で来て下さいました。現在は高知ハビリテーリングセンター長として重責を担う上田さんは、白いジャケットを着こなす美しい女性です。登壇された上田さんは、よく通る落ち着いた声でその半生を語り始めました。

上田さんは22歳の時に同乗中の車が交通事故に遭い、頸髄を損傷して胸から下が麻痺してしまう障害が残りました。体育大学でバレーボール選手として活躍し、体育教師を目指していた矢先の事故でした。受傷後、医師から明確に伝えられなかったものの周囲の反応から、次第に障害の重さを知るようになります。怖いから少しずつ質問を繰り返したそうです。入院生活は4年間に亘りました。そして障害を乗り越えていくために、4つの大切なことを受け入れました。
①知る(あきらめきれないが、今の自分を理解すること)
②方法や手段を考える ③小さな成功を積み重ねる ④自分らしさを大切にすること。やがて、同室の患者さんご家族からの「残った目や耳や口を使って生きていかなきゃね」という言葉から、いつか「働きたい」と思うようになります。

4年間の入院生活を終えて高知に戻り、外来に通っていた時、石川誠医師(当時近森リハビリテーション病院長。現当法人理事長)から「うちの病院で働きませんか?」と誘われてソーシャルワーカーとして働くことになりました。そして、ひとり暮らしの厳しさを覚悟のうえで、職場近くのマンションをバリアフリー改修して自立生活を始めました。道具の工夫を重ね、全てを自分でやろうとせず、必要に応じて協力してくれるサポーターとの関係を作り上げていきます。入浴介助を担う高知女子大学看護科(現在の高知県立大)の学生は現在21代目です。また、「命のベル」と称する緊急時に

かけつけてくれる「ベル隊」の方はご近所の皆さん。訪問看護もお願いしています。

上田さんはスキューバダイビング、よさこい祭りなど余暇もどンドン楽しんでます。さらに、高知大学大学院に入学して障害児教育の勉強に挑戦、仕事との両立も果たして見事修了しました。

ソーシャルワーカーの仕事を通して、県内唯一の身体障害者リハビリテーションセンターが当時充分機能していなかったことを嘆いていたある日、そのセンターが民間移管するという情報を得ます。そこで、上田さんは近森会に社会福祉法人を取得して運営することを提案し、近森グループ社会福祉法人が開設した「高知ハビリテーリングセンター」のセンター長に就任することになりました。

上田さんは人生に試練は避けられないと語ります。もう一度この体で生きると言われたら嫌だけれど、一度限りの人生だからこそ生きていくと宣言されます。「泣いて過ごすより楽しく過ごそう。喜び、悲しみ、怒りを素直に感じて心の自由を大切にしよう。幸せは自分で決めるのだ。人生捨てたもんじゃない」と話してくださいました。

事故当時、車内の座席位置を譲ってくれたために亡くなった「親友の分まで生き、自分にできる親孝行をする。そして支えてくれた皆さんに私が私らしく生きること恩返しをする。」と語る上田さん。作詞された「明日に向かって」のCDを講演中に聴かせてくださり、「私は奇跡を信じています。またバレーボールだってできる日がくると信じています。夢を捨てたらだめです。」と講演を終えられました。

講演後の会場は沢山の拍手と大きな感動が溢れ、明日への勇気をいただいた思いがしました。心からありがとうございました。

文責／法人総合企画室 堅田由美子



上田真弓さん プロフィール

昭和41年6月8日高知県生まれ。バレーボール選手として活躍した大学卒業間近交通事故で頸髄損傷となる。教師になる夢は断たれて4年間の入院生活を送る。胸から下は麻痺という障害が残るものの自立生活を始め、平成5年7月よりソーシャルワーカーとして近森リハビリテーション病院にて就業。平成7年にはマンションにて一人暮らしを始める。平成19年6月に結婚、平成20年、高知大学大学院修了。平成20年4月から「高知ハビリテーリングセンター」センター長就任。現在に至る。